

一歳児の手指の発達を促すための あそびの工夫と援助を考える



社会福祉法人 愛護会

金ヶ崎保育園

保育士 菅原 志保

1、研究主題

一歳児の手指の発達を促すためのあそびの工夫と援助を考える

社会福祉法人 愛護会 金ヶ崎保育園

保育士 菅原 志保

2、主題設定の理由

四つ這いから歩行へと発達した1歳児にとって探索活動、様々な素材に触れながらの手指のあそびはとても魅力的なものである。満足するまで存分にあそぶことは、手指の発達のみならず生活面の発達、意欲の高まりにもつながる。一人ひとりの発達の特性や発達過程を理解し、発達の連続性に配慮していくことや、その場面に合わせた援助の仕方を工夫していくことが大切だと考える。

「保育所保育指針 第2章 子どもの発達」「おおむね1歳3か月から2歳」には“歩く、つまむ、押す、めくるなど様々な運動機能の発達や新しい行動の獲得により環境に働きかける意欲を一層高める”“指さし、身振り、片言など盛んに使うようになり2語文を話しはじめる”「おおむね2歳」には“歩く、走る、跳ぶなど基本的な運動機能や指先が発達する。それに伴い食事、衣類の着脱など身の回りのことを自分でしようとする”とある。

1歳児を保育するうえで手指の発達は、さまざまな成長につながる大切な発達の1つと捉え、一人ひとりの発達に応じたあそびの工夫と援助について考えていくため本テーマを設定した。

3、研究のねらい

- ・子どもの興味関心に寄り添いながら、手指の発達を促すためのあそびの工夫と援助を考える

4、研究の仮説

- ・保育士との信頼関係のなかで好奇心や探索意欲を満たすあそびの工夫、援助により一人ひとりが意欲的にあそぶことで手指の発達が促されるのではない

5、研究の内容・方法

①理論研究(文献を参考にする)

②実践研究

- ・一人ひとりとの触れ合いを大切にし、信頼関係を築いていく。
- ・子どもの興味、関心、発達に合わせ手作りおもちゃを考案し、じっくりと手指を動かすことを楽しめるような保育者の援助の仕方を探り実践する。

6、研究の実際

(1)理論研究

〈1歳児の意欲の高まる時期〉

1歳児の子どもにとって生活の中で出会う一つひとつのもの・ことは大きな興味の対象であり、おとなのしていることを自分でもやってみたいという気持ちにあふれている。発達幅は非常に大きい、1歳児期の一つめの特徴として重要なことは、「意欲の高まり」を大切にする時期である。ティッシュを次々と箱からだす等の行為はおとなにとっては必ずしも歓迎できるものばかりではないが制限、禁止しすぎてしまうと、芽生えつつある好奇心や「じぶんでやってみたい」という意欲を抑えてしまうことになる。安全面には十分に注意したうえで、できるだけ自由に探索、試行錯誤ができることが、子どもの興味・好奇心や自分でやってみたい気持ちを育てていく。

参考文献「乳児期の発達と生活・あそび」より

このことから1歳児は生活の中のすべてが興味の対象であり、探索活動や・様々な素材にふれながら手指の発達をうながしていくことで興味・好奇心をかきたて様々な場面で意欲の高まりに繋がっていくのだと考える。

(2)実践研究

〈子どもの姿〉

4月、在園児15名に新入園児3名が加わり18名(1歳～1歳11ヶ月児)でスタートする。在園児がほとんどであるが、新しい環境に慣れず不安で泣くなど、気持ちが不安定になる姿がある。また、自分の思いをまだ上手く表現できず他児を押ししたり叩いたり、かみつきの姿も見られる。新しい環境に慣れはじめると、少しずつあそびに気持ちが向き保育者の関わり、見守りの中で興味ある玩具であそび始める姿がでてきた。

生活面では、食事は高月齢児はスプーンを握りもちで使う姿があるが、手づかみ食べをする姿も多い。着脱も保育士と一緒にしようとする姿が出てきている子ども数名みられるが、手指の発達が伴わず難しい。

〈保育者の思い〉

新しい環境に慣れはじめているが、子どもたちが安心して過ごせる場となるよう子どもたちとの信頼関係を築いていく必要があることから、一人ひとりの気持ちを受け止めることや触れあいを大事にしていきたいと考えた。また、子どもたちのあそび、生活の姿から月齢差、個人差の大きさに配慮し、一人ひとりの発達にあったあそびの工夫、援助の必要性を感じた。その中で、1歳児にとって手指のあそびは魅力的なものと考え、楽しんであそぶ中で手指の発達を促

していくことで、さらに遊びを広げていきたい。

① 実践事例 ぽっとな落とし ～ぽっとなっていい音するね～

〈あそびの内容〉 ・直径5 cmほどの穴をあけたタッパーの蓋に、ペットボトルのキャップを縦に2つ繋げたものを入れる。

〈あそびのねらい〉 ・キャップを握ったりつまみ持ちをし、出し入れすることで手指の発達を促す。(つまむ. にぎる. 入れる)

〈安全面の配慮〉 ・あそんでいるうちに手作り玩具がこわれかけていないか確認をする。あった場合は取り除き誤飲に気を付けていく。

子どもの姿	保育者の援助と配慮
・キャップを手に持つと“なんだろう”と不思議そうに見ている。保育士が転がしたキャップに興味をもち、すぐに拾うと「こっちもだー」と目を輝かせて良い表情をみせている。 ・「ぽっとな」と音が聞こえる度に声をだして笑っている。 <高月齢児> ・「もったい(もう一回)」と次々入れっぱいになると蓋をあけて全部だしてはまた入れ繰り返し楽しむ ・タッパーを持ち歩いたり、重ねたり、と新しいあそびもはじまる。 <低月齢児> ・低月齢児はタッパーの蓋の穴から中をのぞいたり、手のひら全体でキャップをつかみ、一つひとつ穴に合わせて押し込むようにして入れ、入ると「あっ」と驚いた表情をしたあと笑顔をみせる。 ・蓋の空いたタッパーにそのままキャ	・キャップを転がしたり、保育士が入れてみせ、「なんだろうね」と興味をもてるような言葉かけをし“触ってみたい”と思えるような気持ちを引き出していく。 ・子どもの驚きや気付きを見逃さないようにし「楽しいね」と子どもの気持ちに共感していく。 <高月齢児> ・満足するまで繰り返し楽しめるようにしていく。 ・もう一度あそべるよう、開けた蓋を子どもと一緒にもどす。 ・重ねたタッパーが崩れたときに周りにはいる子どもにぶつからないよう十分なスペースをつくる。 <低月齢児> ・子どもの興味に寄り添い夢中になって遊ぶ姿を見守りながらできたときは一緒に喜びあっていく。 ・キャップを口の中に入れないように安全面に配慮していく。 ・子どもが始めた遊びを十分に認め保

ップを次々にいれ満足そうにしている。 ・キャップを両手に持って打ち鳴らして楽しそうにしている。	育士も一緒に楽しんでいく。 ・子どもがキャップを打ち鳴らした時は保育士が歌を歌いリズムにあわせてキャップを打ち鳴らし楽しめるようにしていく。
---	--

<考察>

- ・「ぽっとなおとし」に初めて触れ“なになな”とどの子ども興味をもち、保育者と一緒にあそぶ中で、高月齢児はすぐにあそびかたがわかり次々にタッパーの中にキャップを入れることを繰り返し楽しんでいった。その中で、指先でつまむことが出来るようになったが、高月齢児にとってはすぐに出来るあそびであり、発達の後追いになってしまっていたと反省した。
- ・低月齢児は手のひら全体でキャップをつかんで入れ、タッパーがいっぱいになるまで楽しむ姿があった。手のひら全体でキャップをつかんでいた子ども少しずつ指でつまむことが出来るようになってきたことから、低月齢児には、適したあそびだったと考えた。
- ・保育士の援助としては一人ひとりとしっかりと向き合いながら触れ合いを通し信頼関係を作っていく中で、安心して過ごせるよう心掛けた。また、家庭との連携も大切に保育をすすめた。
- ・「こうやるんだよ」とあそびを知らせるのではなく、期待感でいっぱいになるような誘い方に配慮し、すぐにあそびにはいるのではなく、興味・関心を持たせるような導入をすることで意欲につながったと考える。
- ・どの子ども出来るようになったことから“ぽっとなおとし”より更に手指の発達を促せる新しいあそびを考える必要があると考えた。

② 実践事例 絵カードいれあそび ～いっぱい入ったよ～

<あそびの内容> ・縦1cm横7cmの長方形の穴をあけたタッパーの蓋に、直径6cmの厚紙で作った絵カードを入れる。

<あそびのねらい> ・絵カードを指でつまみ、穴の形に合わせて入れることを楽しみながら手指の発達を促していく。
(つまむ・入れる)

<安全面の配慮> ・あそんでいるうちに手作り玩具がこわれかけていないか確認をする。あった場合は取り除き誤飲に気を付けていく。

子どもの姿	保育者の援助と配慮
<高月齢児> ・カードをみて「おはなだ」「でんしゃだ」と嬉しそうに見たり、並べて満足そうにしている。 ・一枚入ると「はいった」と嬉しそうに保育者に見せにくる。 ・タッパーがカードでいっぱいになると「みて」と保育士に見せ自分で蓋を外しては全部出してまた穴からカードをいれ繰り返し楽しんでいる。 ・昨年度からの在園児はカードをつまみ次々に入れることができるが新入園児は保育士に「やって」と持ってきたりカードを集めて喜んでいる。 <低月齢児> ・なかなかできずに“やって”というように保育者にカードを渡そうとする子もいる。 ・手にカードをもったまま歩いたり、カードを集めて満足そうにしている。 ・他児の持っているカードがほしくて取り合いになることもある。 ・昨年度からの在園児の中にはカードをつまんでいれることができる子もいる。	・「きれいな花だね」「きいろい花もあるね」とカードを見ながら話し興味、関心を持てるようにしていく。 ・繰り返しあそぶ姿を見守りじっくりと手指を動かせるようにする。 ・子どもの言葉に耳を傾けながら「いっぱいになったね」と話し、子どもが伝えようとする気持ちを受け止め言葉にしていく。外した蓋をもう一度しめて繰り返し楽しめるようにしていく。 ・一人ひとりのあそぶ様子を見ながら出来たときは喜び合い、難しい様子があるときは一緒に遊びを楽しんでいく。 ・保育士と一緒にカードをつまんで持ち穴にいれる。自分でできた気持ちをもてるようにしていく。 ・子どもの興味関心に寄り添い一人ひとりがあそびを楽しめるよう玩具の数を十分に用意していく。 ・お互いの気持ちを伝えあい、他にカードがないか一緒に探し見つけた時は喜びあい、またあそびを楽しめるようにしていく。 ・出来たときは一緒に喜びあっている。



<考察>

- ・カードには身近な食べ物や花、乗り物などの絵を貼ったこともあり、どの子も喜んで絵カードを手にする姿があった。「おはなだ」「でんしゃだ」と言葉も聞かれそれに保育士が丁寧に答えることで言葉を促すことができるようにした。
- ・高月齢児は少し難しい姿もあったが保育士の援助により、穴にカードを合わせて入れることを楽しむことができた。その中でペットボトルのキャップより小さいものをつまんで入れることが出来るようになった。
- ・低月齢児は、絵カードを入れることはまだ難しく、絵カードを持つことで満足したり保育者が手を添え一緒に入れることを楽しんだ。“できない”と感じた子でも保育士の援助により“できた”という満足感を得ることができたのではないかと考える。
- ・高月齢児の中でも4月から入園した子には難しいが、低月齢児でも昨年から保育園で様々なあそびの中で手指を使ってあそんできた子は絵カードを入れることができた。月齢差、個人差だけでなく、それまでの環境やあそびの経験が大きく影響するのだと感じた。
- ・子どもたちに興味を持たせることは出来たが発達上難しいと感じた。あそびの内容は保育士の“こうなってほしい”という思いだけで子どもに押し付けるだけでなく、1歳児の発達過程を理解し一人ひとりの発達を捉え考えていかなければならないと反省した。乳幼児の運動機能は体の中心から末端(手指)にかけて発達していくことから手のひら全体を使うあそびを楽しむことが必要だと考えた。

③ 実践事例 紙遊び ～びりびり楽しいね～

<あそびの内容> ・ 広告紙を破く、ちぎる、丸める

<あそびのねらい>・広告紙を破く、ちぎる、丸める等を行いながら様々な手指の発達をうながしていく。

<安全面の配慮>・保育室を走り誤って広告紙の上に乗る滑ることがないように気をつける。

子どもの姿	保育者の援助と配慮
・2つの保育室に分かれることで落ち着いた環境の中で過ごしている。 ・広告紙を広げてその上に座ったり、ゴロンと寝転がり気持ちよさそうにしている。布団のようにお腹にもかけ友だちと顔を見合わせて「ククッ」と笑い良い表情をみせている。 <高月齢児> ・保育士が広告紙を触ると“なにが始まるんだろう”というような表情で興味をもってじっとみている。 ・広告紙の端を両手でつかみ前後に手首を動かして破き、ビリビリと音が聞こえると目を輝かせ良い表情をみせる。 ・夢中になって細かくちぎる姿がある。 ・小さく丸めたり、細かくやぶいた紙をつまんで拾ってビニール袋にいれ「ほらみて」「いっぱいだ」と保育者に見せにくる。 <低月齢児> ・広告紙を横に引っ張るようにして破きビリビリと音が聞こえると目を輝かせ良い表情をみせる。 ・ボール状になった袋をポンポンと投	・一人ひとりがゆったりとしたスペースの中で楽しめるように、高月齢児と低月齢児を2つの保育室にわけて取り組めるようにする。 ・「気持ちいいね」と言葉をかけながら保育士も一緒に子どもの側に横になり視線を合わせながら楽しさを共感していく。 ・「これはなにかな」と話しながらクシャクシャにして音を出したり、丸めたりし興味をもたせるようにしていく。 ・破いた音が聞こえた時は子どもと一緒に驚いた表情をして気持ちに共感していく。 ・じっくりと手指を動かす姿を見守りあそびが充実するようにしていく。 ・ビニール袋を用意しあそびが広がっていくようにしていく。 ・子どもの驚きに共感しながらできたときは十分に認め繰り返し楽しむようにしていく。保育者も一緒にあそぶ。 ・広告紙がいっぱいになった袋の口を

げたり、保育者や友達と転がして楽しむ姿がある。	セロハンテープで留め、ボール状にして転がし興味を持たせるようにしていく。
-------------------------	--------------------------------------

<考察>

- ・高月齢と低月齢に分かれたことでスペースも確保されゆったりとあそぶことができた。保育者も一緒にあそびを楽しみながら、手のひら全体を動かすことや指先を使ってちぎったりできるよう配慮した。広告紙の取り合い等であそびが途切れることがほとんどなく、夢中になってあそびを楽しんでいたことから、環境設定は良かったと考えた。
- ・子どもの興味関心にあったあそびとなり意欲的にあそぶことで、無理なく手指の発達を促すことができた。今後も様々な紙あそびを考えより魅力的なあそびにしていきたい。
- ・高月齢・低月齢児ともに十分にあそびを楽しむことが出来たことから年齢発達にあった手指の発達を促すために魅力的なあそびだと感じた。破いたり、ちぎったりするだけでなく、小さなビニール袋に紙を入れて作った一人ひとりのボールに、子どもたちも喜びあそぶことができた。
- ・一人ひとりのボールを保育士が洗濯バサミでつるしている時に床におちた洗濯バサミを拾った子が自分の服の裾にその洗濯バサミをつけ嬉しそうにしていた姿から、洗濯バサミを使ったあそびを取り入れたいと考えた。

④ 実践事例 洗濯バサミあそび ～ぱっちゃん ぱっちゃんってなんだろう～

<あそびの内容> ・洗濯バサミで厚紙をはさむ

<あそびのねらい> ・指先に力を入れて洗濯バサミをつまみ厚紙を挟むことで手指の発達を促していく。

(つまむ. ひろげる. はさむ)

<安全面の配慮> ・あそんでいるうちに洗濯バサミ、厚紙等がこわれかけていないか確認をする。あった場合は取り除き誤飲に気を付けていく。

子どもの姿	保育者の援助と配慮
<高月齢児> ・洗濯バサミを指でつまみ、先が開くと良い表情を見せ厚紙を挟むことができる。	・一人ひとりが十分に楽しめるように洗濯バサミの数を多めに用意する。 ・厚紙を持つのが難しそうな子は保育

・牛乳パックの箱を並べて洗濯バサミでつなげ「くるまだよ」と嬉しそうに保育士にみせる。 ・洗濯バサミを3～4個つなげたものを「しっぽ」と言ってズボンにつけ保育士や他児に見せ楽しむ。 <低月齢児> ・片手で洗濯バサミを手のひらで包むようにして握り、厚紙を挟もうとするが洗濯バサミを開くことが精いっぱいでもう片方の手で厚紙をもつことはできない。 ・口に入れようとする姿がある。 ・牛乳パックの箱に洗濯バサミをいれて満足そうにする。 ・保育士がそばにいて安心してあそぶ姿がある	・士が持って支えるようにする。 ・子どもの発想を大切にして見立て遊びを楽しみながら手指の発達も促していけるようにしていく。 ・保育士も子どもと同じしっぽを作りズボンにはさみ、楽しい気持ちを共有していく。 ・自分でしてみようとする姿を見守りながら保育士が厚紙を持ち、こどもが洗濯バサミではさみやすいようにしていく。 ・口に入れないように気をつける。 ・あそびの楽しさを共感していく。 ・一人ひとりのあそぶ姿に応じ、側に寄り添い声掛けをし一緒にあそんでいく。
---	---



<考察>

- ・子どもの興味を示した洗濯バサミでのあそびを取り入れたが、高月齢児は指でつまみ厚紙にはさむことができているのに対し、低月齢児は手のひらで

包むようにして握っていたことから、低月齢児に設定するあそびとしてはまだ難しかった。

- ・保育士の援助として、言葉かけ援助を工夫し“さわってみたい”という気持ちを高めながらすすめることができた。
- ・同じ洗濯バサミでも子どものあそびの様子は様々であった。厚紙だけでなく、牛乳パックを用意する等、あそびに変化をつけたことも意欲的にあそび、手指の発達を促すことにつながった。
- ・高月齢児はこれまでのあそびの中で4月当初より手指の発達がみられている。着脱面でもその成長は感じられ、以前はお尻の下までしか上げられなかったズボンをお尻の上まで上げられる子が増えてきた。手指の発達が生活面の発達にもつながったと考える。
- ・高月齢児は服に付いているボタンに興味をもちしてみようとする姿があるのでボタンあそびを取り入れたい。低月齢児はつまむことがまだ難しいことから「つまむ」というあそびを更に行う必要性を感じた。

⑤実践事例 ストロー落とし ～じょうずに つまんだよ～

- <あそびの内容> ・ペットボトルに極太のストローを入れる
- <あそびのねらい> ・ストローをつまんでペットボトルに入れることで手指の発達を促していく。(つまむ、入れる)
- <安全面での配慮> ・あそんでいるうちに手作り玩具がこわれかけていない確認をする。あった場合は取り除き誤飲に気を付けていく。

子どもの姿	保育者の援助と配慮
<低月齢児> ・ストローを数本まとめて入れようとする子の姿もある。 ・ペットボトルがストローでいっぱいになると上下に振り音が鳴るのを楽しむ姿がある。 ・一本ずつ指先でつまんでペットボトルに入れることができると「みて」と良い表情で保育士にみせる。 ・あそびに慣れてくると少し細いストローでもじぶんから興味をもってあ	・ストローの太さは、つまみやすい直径10ミリからはじめる。 ・いっぱい入った喜びを共感しながら歌をうたいリズムに合わせてマラカスのようにし楽しめるようにしていく。 ・ストローがいっぱいになったら中からだし、繰り返し行い満足するまであそべるようにしていく。 ・子どものあそぶ姿を捉え、ストローの太さを8ミリへと変える。

そぼうとする姿がある。 ・ストローを口に入れようとする姿がある。	・ストローを口に入れないよう安全面に留意しながらすすめていく。
-------------------------------------	---------------------------------

<考察>

- ・ストローの太さを配慮し、指でつまみやすい極太(直径10ミリ)、普通(直径8ミリ)のストローの順であそびをすすめたことにより夢中になって楽しむ姿があった。
- ・ペットボトルがいっぱいになると上下に振り音が鳴るのを楽しんだりすることで“もっとあそびたい”という意欲につながったと考える。
- ・子どもたちの“できた”という喜びに共感しながら、細いストローも取り入れて手指の発達を促していきたい。

⑥ 実践事例 ボタンはめ ～ひとつひとつ ゆっくりと～

<あそびの内容> ・ボタンをボタンホールに入れる。

<あそびのねらい> ・ボタンをボタンホールに入れることで手指の発達を促す(つまむ、ひっぱる)

<安全面の配慮> ・あそんでいるうちに手作り玩具がこわれかけていないか確認をする。あった場合は取り除き誤飲に気を付けていく。

子どもの姿	保育者の援助と配慮
<高月齢児> ・ひとつボタンを入れることができると「つぎこれにする」と夢中になってつなげてあそび楽しむ。(数名) ・数個できるが続かずあそびへの関心が薄い <低月齢児> ・ボタンを手のひら全体でつかむようにしてボタンホールに入れようとするがなかなか入らず「やって」と保育者にもってくる姿がある。 ・ボタンホールに人さし指をいれて「できたよ」と嬉しそうに保育士に	・保育者がフェルトをもってボタンをはめやすいようにする。できた時は十分に認め落ち着いた環境の中で繰り返し楽しめるようにしていく。 ・子どもの様子にあわせて無理なくあそびに誘っていく。 ・落ち着いた環境の中で取り組むようにしあそびが続くようにしていく。 ・あそび方を丁寧に知らせたり、見せていく。 ・子どもの発想を認め、無理なくボタンはめのあそびへと誘っていく。

みせる。 ・ボタンを集めて満足している姿がある。 ・あそびに興味を示さず指しゃぶりをしている子の姿があった。	・子どものそばに寄り添いあそびに誘い一緒にあそんでいく。
--	--

<考察>

- ・ボタンはめができた子は高月齢児の中で数名で、低月齢児には発達上難しい段階なのだと感じた。指しゃぶりをする姿もあり、あそびの設定をするにあたり配慮不足だったと反省する。
- ・実践②でも反省として取り上げたが一人ひとりの発達の特性や発達過程を理解することが大切だと再認識した。あそびを達成できそうな一部の子を中心としてクラス全体でのあそびを設定するのではなく、個々の発達に合わせ見通しをもったあそびの工夫と保育者の援助によりあそびが充実するのではないかと考える。
- ・ボタンをつまむことが難しい子が多かったことから、小さいもの細かいものをつまむ手指のあそびを取り入れていく必要があると感じた。
- ・高月齢児はボタンはめの他にも様々な手作りおもちゃで手指のあそびを楽しめるように工夫し、低月齢児はストロー落としにあそびを戻し「つまむ」というあそびを取り入れていきたい。その際保育室を 2 つに分けることで落ち着いた環境作りにも配慮することも大切だと考える。

⑦ 実践事例 ストロー落とし ～みんなで いっしょ たのしいね～

<あそびの内容> ・極太、普通、細いストローを使いペットボトルに入れる。

<あそびのねらい> ・ストローをつまみペットボトルに入れることで手指の発達を促していく。(つまむ.入れる)

<安全面の配慮> ・あそんでいるうちに手作り玩具がこわれかけていないか確認をする。あった場合は取り除き誤飲に気を付けていく。

子どもの姿	保育者の援助と配慮
<高月齢児> ・細いストロー(4ミリ)を数本まとめてペットボトルに入れようとするが入らず、保育士の真似をし一本ずつ入れる。慣れてくると数本まとめて入れ	・ストローをみせながら「これはなんだろう」と話し興味をもたせるようにしていく。保育士がペットボトルにストローをいれ“やってみよう”

る姿がある。「ほらみて」とペットボトルがいっぱいになると表情よく保育者にみせる。極太のストローにも興味を示し次々と入れたり、出したりを繰り返し楽しむ。

<低月齢児>

- ・いい表情で一本ずつつまんで、ゆっくりとペットボトルに入れて“はいった”というような表情でにっこり笑う。
- ・細いストローを見ると別の物をみるようにして不思議そうにしているがすぐに手をのばし触れてみようとする。
- ・細いものも指でつまんで一本ずつつまんでいれることができる
- ・数本まとめてストローを入れようとする姿がある。
- ・ストローを口に入れようとする姿がある。

という気持ちを引き出し様々な太さで楽しめるようにしていく。

- ・子どもと一緒にペットボトルを支え、ストローを入れやすいようにする。
- ・「今度はちょっとほそいね」と話しながら保育者がペットボトルに入れあそびに誘っていく。やってみようとする気持ちを大切にしながら入った時は一緒に喜んでいく。
- ・子どもの楽しんでいる姿を見守り楽しさを共感していく。
- ・口にストローを入れないように気をつける。



<考察>

- ・細いストローをペットボトルに入れることができるようになってくると鉛筆持ちのようにつまむことができるようになってきている。生活面で見てみると高月齢児はスプーンを下からの握り持ちや鉛筆持ちをし食事をしようとする姿が見られるようになってきている。あそびと生活は離して捉えるのではなく連動していることに気づかされた。あそびの中で楽しみながらスプーンの持ち方を知らせていけるようにしていきたい。

⑧ 実践事例 お弁当づくり ～おいしく できたよ～

- <あそびの内容> ・スプーンでキャップやフェルトのやさいをすくい容器から容器へ移す。すくったものをお弁当にみてる。
- <あそびのねらい> ・スプーンの持ち方に配慮し持ち方を知らせながら手指の発達を促していく。(一人ひとりの発達にあわせて下からの握り持ち、上からの握り持ち、鉛筆持ちをする)
- <安全面の配慮> ・あそんでいるうちに手作り玩具がこわれかけていないか確認をする。あった場合は取り除き誤飲に気を付けていく。

子どもの姿	保育者の援助と配慮
<高月齢児><低月齢児> ・プラスチックのカレースプーンでキャップをすくいお弁当箱に入れ夢中になり何度も繰り返してあそぶ。周りの子もそのあそぶ姿を見てスプーンを持ち、「こう?」「みてみて」と保育者に見せ喜んであそぶ。 ・フェルトで作った野菜等も入れ、すくったり、容器から容器へ移す事を楽しむ。 ・出来たお弁当を食べるコーナーに持っていく保育者や友達と食べる真似をしたり「ほらみて おいしそうでしょ」と作ったものを見せ合い会話を楽しむ姿がある。	・月齢や、個々の様子に合わせてスプーンの持ち方を無理なく知らせるようにする。 ・出来たときはその場で十分に認め喜び合う。 ・「これはにんじんだよ」等、やさいの名前を話しながら、手指を動かせるようにしていく。 ・お弁当を作るところ、食べるところとコーナーを分けてあそびの設定をする。 ・「おいしいね」と子どもの気持ちに共感しながらあそびがつづくようにしていく。



<考察>

- ・スプーンですくうというあそびをすることで高月齢児は指先を自由に動かしスプーンを鉛筆持ちをすることができるようになってきた。
- ・低月齢児は下からの握り持ちや上からの握り持ちをする姿がある。今後も一人ひとりの月齢や発達に合わせて食事の面と照らし合わせながらあそびの中で手指の発達を促していきたいと考える。
- ・保育士の配慮として、個人差に留意し楽しみながらスプーンを持つことで手指の発達を促せるようにした。生活面と連動させながら一人ひとりの発達を見ていくことで個々の課題が見えてきたので、担任間で話し合いをもちながら保育をすすめていきたい。

7、研究の結果と考察

- ・安心できる大人(保育士)との関わりが情緒を安定させあそびへの意欲の高まりへと繋がっていった。
- ・あそびを充実させていく上で環境設定はとても大切であると感じた。
- ・こどもの発達に合わせて連続性に配慮しあそびを設定した事で発達を促すことができた。子どもの興味関心に寄り添い又、保育者の思いからその時の子どもの様子に合わせて手作りおもちゃであそぶようにしてきた。その実践の中で子どもの手指の発達に伴わず難しかったり、すぐにできる内容があったことを反省し、どんなあそびが合っているのかを探ってきた。
- ・手作りおもちゃは子どもの発達を促すものであり、子どもの発達の後追いになってしまってはいけない。その時期の子どもにあったあそびなのか見極めながら保育をしていくことが大切なのだと考える。(表1 参照)
- ・手指の発達を促していくためには手指を十分に動かすことが必要であり指先

を使うあそびからではなく手のひらも使うあそびから始める事で、無理なく手指の発達を促すことができたと考える。

- ・子どもの発達の見通しをもったあそびに取り組み様々なあそびを通し、意欲的にあそぶことが手指の発達に繋がったと考える。
- ・手指の発達を促す様々なあそびが生活面での発達・意欲の高まりにつながった。着脱、食事、言葉等の成長に変化が見られた。
- ・様々な手指のあそびは月齢、個人差だけでなく今までの環境やあそびの経験が大きく影響するのだと感じた。

表 1 <子どもの姿とあそびの流れ>

高月齢児のあそび	低月齢児のあそび
実践①「ぽっとん落とし」 あそびがすぐできたので落とす穴を小さくしてつまむ、入れるあそびを取り入れた。 ↓ 実践②「絵カードいれあそび」 カードをつまみ穴に入れる事がすぐに出来る子と難しい子がいるので手のひら全体を使うあそびが必要と感じた。 ↓ 実践③「紙あそび」 丸める、やぶくなど手のひらを使うあそびを十分に楽しんだ。次の段階として指先を十分に使うあそびを取り入れていきたいと感じた。 ↓ 実践④「洗濯バサミあそび」 手指が発達してきているので洗濯バサミを上手に広げ厚紙等をはさんであそぶ姿がみられた。 実践②の「絵カードいれあそび」を行った所前回できなかった子もカードを次々と穴にいれることができた。	実践①の「ぽっとん落とし」 繰り返し楽しむことができた。落とす穴を小さくしてつまむ、入れるあそびを取り入れた。 ↓ 実践②「絵カードいれ」 カードを指先でつまみ穴に入れることがまだ難しいのであそびの段階として手のひら全体を使うあそびが必要と感じた。 ↓ 実践③「紙あそび」 丸める事により手のひら全体を十分に使うことができた。次のあそびとして手指を十分に使うあそびを取り入れていきたいと感じた。 ↓ 実践④「洗濯バサミあそび」 洗濯バサミはつまんであそぶことが難しいので極太サイズのストローを利用しつまむことができるようにしていきたいと考えた。 (極太にすることでつまみやすい) ↓

発達を促すため様々な手指のあそびを取り入れていきたいと感じた。 ↓ 実践⑥「ボタンはめあそび」 難しく出来るのは数名だけであった。しかしあそびに興味を示し、出来ないが夢中になり取り組む姿が見られるので他の手指のあそびも並行しながら行っていきたいと考えた。 ↓ 実践⑦「ストローおとし」 第1, 2, 3指でつまみ持ちをする姿が見られるのでスプーンを持つあそびを取り入れていきたいと感じた ↓ 実践⑧「お弁当づくり」 スプーンを下からの握り持ちや鉛筆持ちをしてあそぶ姿が見られた。	実践⑤「ストローおとし」 極太サイズのストローはつまみやすくストロー落としを喜んで遊ぶ姿が見られた。次の段階として難しくてできなかった実践②の絵カード入れ遊びを行った所上手にできる子が増えてきているためもっと様々なものをつまめるようにしていきたいと感じた。 ↓ 実践⑥「ボタンはめあそび」 このあそびは難しくできなかったのが発達の段階として実践⑤のストローおとしのあそびを行い、細いものでもつまめるような活動に取り組んでいきたいと考えた。 ↓ 実践⑦「ストローおとし」 高月齢があそぶ姿を真似し様々なストローを一本ずつつまんで入れ楽しむ姿が見られた。しかし、細いストローはまだ握り持ちする姿が見られた。 ↓ 実践⑧「お弁当づくり」 スプーンですくってあそぶことに興味をもち、上からの握り持ち、下からの握り持ちで様々なものをすくってあそぶ姿が見られた。
※「ボタンはめあそび」は、興味を示し夢中になりあそんでいる姿が見られるのでボタンをいれる穴を大きくするなどあそびの工夫と配慮をしながら様々な手指のあそびを楽しむ中で少しずつできるようにしていきたい。	

8、今後の課題

- ・1歳児にとって安心できる大人(保育士)との関わりが情緒を安定させあそびへの意欲へと繋がっていく。今後も子どもたちの思いをしっかり受けとめながら、十分にふれあいをもち保育を進めていくことが必要だと感じた。

- ・一人ひとりの発達を見極め、発達の後追いにならないよう配慮しあそびを設定しなければならない。また、あそびを設定するときは何をねらいとするあそびなのかを明確にして取組み、実践した後は必ず振り返りをしていく。
- ・手指の発達を促していくためには、発達の見通しをもって取り組んでいくことが必要である。子どもたちが意欲的にあそぶことが手指の発達に繋がるので引き続き学びながら実践していきたい。
- ・手指の発達は、着脱、食事等の生活面や言葉などの成長に繋がったことから手指の発達を促す様々なあそびは1歳児の発達を考える上で、大切なあそびと捉え今後も多く取り入れていきたい。

※引用文献、参考文献

- ・ 保育所保育指針
- ・ 乳幼児期の発達と生活・あそび